

パネル

技術の自然と身体に対する介入を積極的に評価する傾向は、この段階で一般化すると考えることができる。

一九七六年の毛沢東の死後、鄧小平の下で改革開放政策が採られると、正統的な生物学（遺伝子学）が復活するが、それは遺伝子が「劣性」の資質の原因であり、それを除去することを主張する優生学的な言説を大量に生み出した。現在の中国における「計画生育」政策は強制力に基づくものであるが、その背景には、民間レベル、特に知識人の間での優生思想への広範なコンセンサスが存在するのである。

つまり、中国においては、全体論的宇宙観という宗教的な思考を通して近代が吸収されると同時に、その過程で全体論的宇宙観自体が変容し、現在の生命倫理言説に至る考え方を生み出したのである。それを一つの宗教思想として分析するという視点は、必然的に、中国的な生命倫理言説を歴史的に相対化することに繋がるであろう。

パネルの主旨とまとめ

安 藤 泰 至

近年、本学会においては生命倫理に関係した研究発表が増えている。しかし、「宗教と生命倫理」というテーマは、「宗教」「生命倫理」というそれぞれの語に複数の意味や次元があるだけでなく、生命倫理自体が学際的な分野であることや、（広義

の）宗教学には固有の方法論がないことなどによって、議論が拡散し、かみ合わないことも少なくない。本パネルの目的は、宗教が生命倫理についてどのように発言できるか、という通常の問いを裏返して、生命倫理について語ること（あるいは語れないこと）が宗教や宗教学にとってどのような意味をもつか、という問題設定をとることで、宗教と生命倫理をめぐる問題を整理しつつ、そこに多様な議論の土台となる共通の基盤を探ることにあつた。四人のパネリストはそれぞれ、キリスト教（土井）、仏教（佐藤）の立場から、宗教に依拠せずに生命の価値の問題を問おうとする生命学（森岡）の立場から、実証的宗教学（池澤）の立場から、生命倫理の問題がそれぞれの研究や実践にどのような問いを投げかけているのかについて発表を行った。土井健司は、生命倫理の問題が医学研究や医療の場において忘却されてきたのは誰かという問いを根本にもっており、生の周縁にいる人々への忘却を回復するという方向性を帯びているとすれば、歴史的にキリスト教躍進の大きな原動力となつた隣人愛やフィランソロピア（人間愛）といったキリスト教思想がいま一度試されているのではないかと論じた。佐藤雅彦は、生命倫理の問題に答えるのは、仏陀の教説それ自体やその手がかりとなる仏教経典ではなく、仏陀の教説を「このように受けとめさせていただく」という姿勢で具体的な現実に関わっていく「宗教家」であるとし、誰もが救われる仏教を標榜するのであれば、賛否両論ある生命倫理問題に答える際には、是非論を超えた発言を用意すべきだと述べた。こうした宗教サイドからの二人の提題に対し、森岡正博は、臓器移植法改正をめ

パネル

ぐる近年の議論を例に挙げつつ、子どもの脳死移植への慎重論のなかでは、移植を待つ「この子のいのちを救え」という一言に對抗できるような力、人々の宗教性の次元の心に訴えかけるような力をもった言葉が発明できなかったと述べ、宗教教団や宗教者からの取り組みはそうした形で人々の心に届かなかったのではないかと問いかけた。最後に池澤優は、中国における生命倫理の言説を題材に、そうした言説は宗教的伝統を直接に反映したものではなく、宗教的伝統文化と近代との間で織りなされた双方向的な歴史のプロセスから生み出されたものであることを指摘し、生命倫理言説自体を一種の宗教性として見ることによって、それを歴史的な形成物として相対化する可能性について論じた。コメンテータの安藤泰至は、生命倫理言説はそれの「いのちについての語り」である以上、生命倫理言説はそれを語る者たちが自覚するか否かに関わらず、「いのちの語り、自覚、表現」を本質とする広い意味での宗教と必然的に重なってこざるを得ないことを指摘した。また、広い意味での宗教的生命倫理は、もっぱら個人のこの世における「生活」「人生」といったレベルでいのちを語る世俗的生命倫理に対して、現世的な生を超えた「永遠のいのち」や「人間を超えたいのち」をも問題にすることで、いのちの価値や意味への本来的な問いを深められる一方で、それぞれの生活・人生を生きる個々の人々の生へのまなざしを弱め、国家的なレベルでの生死の全体的管理に与してしまう危険性についても注意を促した。さらに、生命の価値や意味をめぐる問いにおいて宗教の独自性はどこにあるのか、宗教が生の際縁にある人に寄り添うとはどのような関

わり方を意味するのか、といったフロアからの質問も交えて、白熱した議論が展開された。宗教と生命倫理をめぐるパネルは本学会で初めてであるが、満員の聴衆と熱気はこの問題に対する関心の高さをうかがわせた。